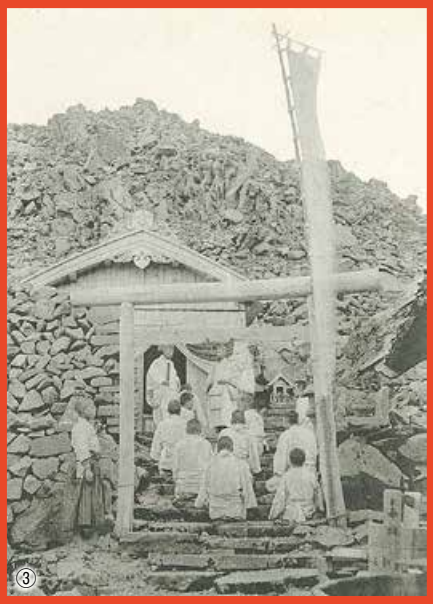


鳥海山 史跡案内

① 鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮月山神社本殿　身舎・蟇股　彩色彫刻
② 中村不折画「蕨岡口之宮」（不折山人筆『鳥海山』より）
③ 古絵葉書「鳥海山上御本社」
④ 鳥海山大物忌神社第五代宮司　斎藤美澄筆
御神号「鳥海山大物忌大神」の一部

イラスト：木山由紀子

鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮境内

鳥海山は、その山容の秀麗さから「出羽富士」とも呼ばれる信仰の山で、古くより、人々はこの山そのものを「大物忌神（おおものいみのかみ）」として崇めてきた。大物忌神の文献上の初出は、『続日本後紀』の承和五年（838）五月十一日条「奉授出羽国従五位勲五等大物忌神正五位下」という記述である。九世紀に、朝廷は大物忌神を国家に関わる重要な出来事を予言する神、そして、物忌みや祭祀を疎かにすると、噴火鳴動する恐るべき神として認識していた。延長五年（927）に、大物忌神は吹浦で並祀される「月山神（つきやまのかみ）」とともに「名神大」となり（『延喜式神名帳』）、その神階を「正二位」にまで高めた。

現在、鳥海山大物忌神社が鳥海山祭祀の中心的存在となっている。この神社は、鳥海山山頂の「御本社」、そしてふたつの里宮「蕨岡口ノ宮」・「吹浦口ノ宮」の三社で構成される。吹浦口ノ宮は、古代から鳥海山の神「大物忌神」と月山の神「月山神」を主祭神としてきたことから、「両所宮」と呼ばれてきた。この「両所宮」には、中世の鳥海山信仰の様態を示す貴重なふたつの文書（いずれも国指定重要文化財）が伝わっていることで知られる。

一　鎌倉幕府奉行人連署奉書

承久二年（1220）に鎌倉幕府執権北条義時の命に基づき、藤原氏と三善氏が連名で北目地頭新留守氏に送った書状で、庄内地方最古の文書とされる。この書状は、承久元年（1199）に発生した将軍源実朝の暗殺事件の影響で両所宮の社殿の造営作業が遅滞したが、これを速やかに行うよう北目地頭新留守氏に催促するものである。

（非公開）

二　北畠顕信寄進状

正平十三年（1358）に、南朝の重臣北畠顕信が天下再興と奥羽の平安を祈願するために、由利郡小石郷乙友村を「出羽國一宮両所大菩薩」に寄進したことを示す文書である。「両所大菩薩」とは、大物忌神の本地仏にあたる薬師如来と、同じく月山神の阿弥陀如来のことを意味する。

（非公開）

中世に入ると、修験者たちは鳥海山山麓周辺に定着して修験集落を形成した。吹浦と蕨岡はその代表的なもので、近世期以降、これらは鳥海山参りの拠点（登拝口）として機能するようになる。近世の吹浦には二五坊・三社家が存在し、「両所宮神宮寺講堂」で鳥海山祭祀を行った。彼らが継承してきた修験道の年中行事は明治初期の神仏分離を契機に、「管粥神事」（一月五日）、「大物忌神社例大祭」（五月四・五日）、「月山神社例大祭（御浜出神事・玉酒神事）」（七月十四・十五日）として神式で執行されるようになり、今日に至っている。

本境内の一ノ鳥居と二ノ鳥居を通り、参道を進むと右手に下拝殿がある。左手に見える約百段の石段を登り、三ノ鳥居をくぐると拝殿が見え、最上段に「大物忌神社」と「月山神社」の両本殿が並び立っている。前身の本殿が宝永三年（1706）正月の火災で焼失し、宝永八年（1711）に庄内藩酒井家によって、現本殿が再建されたと伝わる。両社殿は、彫刻や脇障子の絵柄を除けば、全く同型、同大の一間社流造の建築である

脇障子板絵
大物忌神社本殿（右二つ）
月山神社本殿（左二つ）

大物忌神社本殿
向拝　蟇股　彫刻

大物忌神社本殿（右）／摂社月山神社本殿（左）

写真提供：御船達雄氏

鳥海山大物忌神社 吹浦口ノ宮境内図

名神鎮座し給ふ地は吹浦といふ
吹は風ふくとよめり
天地の生気を以村名とす

進藤　重記『出羽國風土略記』

五月四日の例大祭宵宮には、この両社の前で「吹浦田楽舞」（山形県指定無形民俗文化財）の花笠舞が大物忌神と月山神に奉納される。宵宮においては花笠を山吹や八重桜の生花で彩るが、五日の本祭りでは鮮やかな赤い造花を装飾に用いる。舞のクライマックスには、花笠は参拝客に向かって投げ入れられ、ご利益を求める人々が奪い合う。

二十五坊は田楽法師也
十六歳より三十三歳迄舞役を勤む
番組数多有り

進藤　重記『出羽國風土略記』

①宵祭　オノコロ島での諸冊二尊の舞
②宵祭　本殿前での花笠舞
③本祭での先払い・奴振り
④本祭　二の鳥居前での花笠舞

御浜出神事　おはまいでしんじ

七月十四日、月山神、大物忌神の神輿が神社から西浜海岸まで巡行し、海岸、鳥海山山頂、七合目御浜、宮海、飛島の五か所で同時に篝火を焚く。五穀豊穣、大漁を祈る神事で、火合わせともいう。特に吹浦と飛島は縁が深い。

吹浦村の以西海上を距てること七里許にして一島あり。名けて飛島と云ふ。其土石共に鳥海山上の土石草木と其素質を同じくす。古来伝えて曰上古鳥海山の一部分裂飛去して此島を成せりと。（中略）其島中に鎮座する所の風神を同日時に海辺に渡御し神官及挙村相会して祭典を執行するを例とす。此時に當り鹽干となり海面に八畳敷余の平面石現はるるを常とす。島民之を称して祝詞石と云ひ以て奇談となす。

阿部正巳「鳥海山史」『山形県史蹟名勝天然紀念物調査報告　第五輯』より

吹浦口ノ宮の下拝殿には、酒田の森重郎（雅号竹堂）奉納の「火合神事」の絵馬が伝わっている。明治二十五年七月避暑のため、湯の田温泉に泊まり、宿の主人の勧めで「火合作祭」を見学、「神火の明かりを遙拝」し、感銘を受けた森は、友人の画家加藤雪窓にその模様を描かせたとの詞書きがある。

②

①

③

①②板絵／右大神・左大神　安永三年（1774）飛島法木村斎藤長太夫　奉納
③神輿巡行

はろ〳〵に澄みゆく空か。
裾ながく　海より出づる鳥海の山
釈　迢　空　歌集『水の上』

ここにして浪の上なるみちのくの
鳥海山はさやけき山ぞ
齋藤茂吉　歌集『白き山』

鶴岡市加茂からの鳥海山と庄内砂丘の眺望

丸池神社境内

丸池神社は、一般には丸池様と称され、瑠璃色の池そのものが御神体として崇敬されてきた。鳥海山大物忌神社の境外末社に当たり、現在の祭神は、田心姫命、市杵島姫命、多岐津姫命の宗像三女神である。

丸池神社の本殿は、神池を拝むような形で配置されており、一間社流造の小社であるが、向拝に木階を設けない、見世棚造風のやや変則的な造りの社殿である。八月七日の例祭では、本殿の向かい側の拝殿で、御頭舞（獅子舞）、巫女舞が奉納されている。

また、境内北西の山の斜面には、巨岩を御神体とする古四王神社が鎮座する。「きかずさま」といい、耳の病に御利益があるという。

江戸時代後期、天保の頃（1830年代）、遊佐町下長橋に住む風流人たちが遊佐郷の景勝地を巡った記録である「遊佐細見往来」という書き物に、以下のような記述がある。

> 「丸池大明神を参詣いたしける。此池は稲倉嶽の御尊の御手洗にして、此所に瑠璃の御玉と云ふ宝物あり。御機嫌の節は彼の御玉、水の上に浮むと云伝ふ。若し此池に塵塊抔（など）を投入不浄いたし候ば、俄に東風吹出し、田畑をそこなふ事眼前なりと。此池の名、俗説もり池と云ふ。今にも森池東風とて吹くことあり。慎むべし。昔より此の池に住みし魚皆片目なりと承る」。

稲倉岳の神の御手洗との謂れは、水分の山でもある鳥海の神と本池の深い繋がりをうかがわせる。稲倉岳は、大物忌神の正体ともされる倉稲魂神（うかのみたまのかみ：農業の神）を祀り、「乾に稲村ヶ嶽在。実は稲倉と云。爰ハ権現本居の所なれば、参詣することを禁ず。」（「出羽國一宮鳥海山略縁起」）と記される鳥海山の奥の院とも言われる聖地である。

また、山上の湖水・鳥海湖と麓の丸池の水脈は地中深く通じているという言い伝えもある。

この池に棲む魚が片目だというのは、前九年の役で、安倍宗任（鳥海弥三郎）と戦った源氏の鎌倉権五郎景政が、宗任に左の眼を弓で射られ、同輩に矢を抜いてもらい、この池で眼を洗ったところ、池が真っ赤に染まり、それ以来この池に棲む魚はみな片目になったという伝説に基づいたものである。

鳥海山からの伏流水を水源とする丸池周辺には、小山崎遺跡（令和二年三月十日国史跡指定）、柴燈林遺跡など縄文の遺跡群が存在し、池の側を清流牛渡川が流れ、秋には多くの鮭が遡上する光景が見られる。このように、本境内は、縄文時代から現代に至るまでの水にまつわる信仰文化が残る貴重な史跡となっている。

①柴燈林遺跡出土の火焔型土器
②小山崎遺跡出土の深鉢形土器
③口元に入れ墨のある土偶（小山崎遺跡）
④丸池様
⑤丸池神社本殿
⑥丸池神社拝殿での御頭舞奉納

高山樗牛の「鳥海山紀行」

『高山樗牛全集　第五巻』
博文館1906　より

鶴岡生まれの明治の文豪高山樗牛が仙台の二高生だった二十歳の時、二つ下の弟良太と鳥海山に登り、その紀行文を「山形日報」に寄せている。良太も「兄樗牛と鳥海山に遊ぶ記」を残している。

「庄内勝地多し、而して予は特に其二を推す。二とは何ぞや、鼠ヶ関、及び鳥海山之れなり。彼は明媚愛すべく、此は崇高懼るべし。」

明治二十四年八月二十五日、樗牛一行は、帰省先の鶴岡の実家を出発する。午前九時に酒田に到着、酒田の旧友宅を訪問し、旧交を温めた後、蕨岡に向けて発つ。

蕨岡に着いたのは、午後三時半であった。鳥海山に登る者のために五軒の道者宿があるという。友人からの紹介状をもって鳥海朝光氏（山本坊）を訪れると、鳥海重任氏（坊不明）を斡旋される。道者の儀礼に関して、樗牛は予告する。

「予等は道者として登山する者に非ず、只、其の景勝を探らんが為なるを以て、拝神に関する諸々の縟礼は一切之れを除去せられんことを以てせり。氏笑うて之を諾す。」

明治二十年代は、近代登山（アルピニズム）の夜明け前で、信仰登山がまだまだ主流であった。

登山の出発は、二十八日の夜中の一時であった。杉沢の熊野橋を渡り、駒止（二合目）を過ぎて、道は次第に山道となり、険しくなってくる。

「黎明、一の木戸に達す、状関門の如し、往来の人を点検するなり。」

ここは、蕨岡口の四合目に当り、横堂とも言われ、道者たちは、この御堂の中を通って山頂に向かった。良太の記録では、「檻札料として金二銭五厘」であった。午前七時、河原宿に到着。

「河原宿を出れば清泉岩を縫て流る、之に臨めば日華透徹、恰も琉璃の如く、之を掬すれば清冽、舌に触れて氷の如し。」

午前九時、外輪に達する。伏拝岳の所に出たのであろう。爆裂火口を見、峨々たる山岳美を讃嘆する。

「山上一平地をなすに非ず、山角相繞て馬蹄形をなし、西面独り欠損して深谷をなす、山間陥落し、怪黒色の岩石、瑰琦として遠く谷に沿て相重り、其間、片青点緑の見るべきものなし、山上は怪巌轟々として天を衝き、相依て鋸歯状をなす。」

続いて、四方遮るもののない眺望の喜びを描写する。そして訪れた啓示の瞬間。

「予、心神恍惚として岩角に踞し、沈々嘘嘯するもの之を久うす。（中略）　憫れむべき哉、人生の空然たるや。爾の眼を放て六合の外を観よ、爾の耳を側てて宇宙の外に聴け、蜉蝣旦夕の智、安ぞ天地永遠の活気を呼吸するを得ん。」

山頂の御本社についてはふれることもなく、握飯を食べ、午前十一時吹浦に向けて下山する。その夜は「楼、海に依りて建つ、清涼愛すべし」湯の田鉱泉に泊まる。

次の日雨模様のなか、酒田に行き、宿泊。翌日、鶴岡の実家に帰着する。その紀行の結語。

「暫く良太と之を記して後日の追憶に充つ。」

良太、この三年後の明治二十七年、夭逝。二十一歳であった。

高山　樗牛　たかやま　ちょぎゅう

明治四年（1871）～明治三十五年（1902）

旧庄内藩士斎藤親信の次男として鶴岡に生まれ、高山家の養子となる。本名、林次郎。仙台の旧制第二高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科に入学。在学中に執筆した「滝口入道」が読売新聞に連載された。雑誌「太陽」等で旺盛な評論活動を行った。享年三十一歳。

鳥海山頂切通

①箸王子

②横堂

③笹小屋内部

④河原宿

⑤河原宿

⑥大雪路

⑦鳥海山上本社ヨリ享和岳ヲ仰ク

版画は、中村不折画「鳥海山」より／鳥海山大物忌神社蕨岡口ノ宮蔵

鳥海山 山頂外輪 鳥瞰図

①チョウカイフスマ（写真提供：佐藤要氏）
②強力による資材の運搬（写真提供：今田為康氏）
③平成29年7月8日夕の山頂での遷座祭（写真提供：髙橋淳史氏）

山頂本殿の式年造営

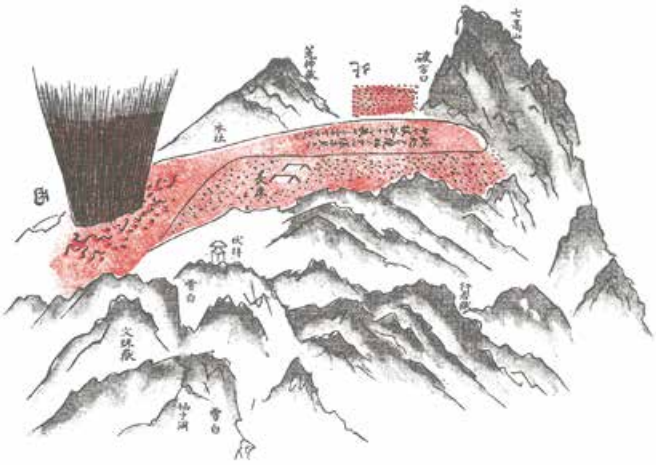
山頂御本社（覆屋）は、木造平屋建、妻入、切妻造板葺屋根の形式で、内部は一室とし、奥に宮殿（本殿）を据える。伊勢神宮と同様の二十年に一度の式年造替の習わしである。

現存の本殿は平成二十九年式年造営で建築されたものである（覆屋は前年建築）。平成二十五年に社殿を造り替えた伊勢神宮の檜の古材を用いている。ヘリコプターが導入される前は、地元の強力が自分の背丈の倍以上もある板材などを麓から担ぎ上げていた。

享和元年（1801）の大噴火

現在我々が眺め、日々拝している山の形は、幾度もの火山生成過程を経ている。大和朝廷を震撼させた貞観十三年（871）の大噴火の様子は、『三大実録』に詳記され、有名である。江戸時代、寛政十二年（1800）から文政四年（1821）にわたった噴火活動によって現在の山容が形成された。享和元年（1801）七月六日の噴火は激烈であったといわれ、荒神岳付近で爆発し、七高山と荒神岳との間に新しく溶岩が噴出堆積し、現在の最高峰新山（2236m）が形づくられた。現代では昭和四十九年（1974）三月一日、全日空機のパイロットが鳥海山山頂付近で噴煙・噴気活動を確認、153年ぶりの火山活動となり、地元住民を驚かせた。

七高山ヨリ焼始煙立所マテ焼クツレ大ナル谷トナル。夫ヨリ吹出テタル石ニテ長床モ埋リ笠板ハカリ見ユル。當時煙立辺ハ火勢ツヨク硫黄ノ涌立音雷ノ如シ。長床辺ヤケ跡一切火氣ナシ。



鳥海山硫黄焼後日見届圖（『飽海郡誌（上）』）

鳥海山大物忌神社蕨岡口ノ宮境内

近世になって、鳥海山を取巻く各地には、修験衆徒がそれぞれ活動拠点を設け、霊峰への登拝口としたが、なかでも蕨岡の衆徒は、龍頭寺を学頭として、鳥海山表口、順峯・蕨岡三十三坊と称して、登拝口の中で最も強大な勢力を誇った。

本境内は、宿坊集落の面影を残す上蕨岡地区（通称「上寺」）のほぼ中央に位置する。随神門（かつての仁王門）を潜ると、右手に朱塗りの神楽殿が見えてくる。神楽殿では、五月三日の例大祭（「大御幣祭」）にあたり、山伏の修行・通過儀礼と一体を成す芸能である「蕨岡延年」（山形県指定無形民俗文化財）が奉納されている。

さらに、参道を進むと、三ノ鳥居を経て、本殿が南面して建っている。本殿の桁行総長は13・8m、梁間の実長も16・9mにも及び、床高も2・3mあまりと高く、かつては「大堂」とも称された。木割が大きく、直線的な意匠でまとめた、豪壮な社殿である。様式的には、伊勢神宮正殿を根源とする神明造にあたる。

①二ノ鳥居と随神門
②末社荘照居成神社　西之坊融朝、御舩治吉（治喜二）らによる彫刻

本殿は、明治二十九年に造営されたもので、高さ3・7m、幅55cm、厚さ8・5cmもの巨大な棟札が残されている。棟梁は、地元上寺の宮大工小野重吉である。戦後の昭和二十八年には、東の山手から現在地に移築する工事を行っている。

この他、境内には、酒田の豪商本間光丘逆修の宝篋印塔や天保年間の三方領地替騒動に関わり非業の死を遂げた時の江戸町奉行矢部駿河守を祀る末社荘照居成神社があるほか、約四百段ある石段を上った、松岳山中腹には、峯中修行の記念碑である「峯中碑伝」や、海抜150m程の低地に奇跡的に残されたブナ自然林がある。

扁額　鳥海山大権現
揮毫　従四位下左少将忠器
（庄内藩第八代藩主酒井忠器公）

扁額　正一位大物忌神社　鳥海山出羽國一宮
揮毫　（伝）宝鏡寺門跡第二十二世本覚院

火災により焼失した社殿の再建が明治二十九年に成り、その竣工を記念しての扁額の揮毫を**勝海舟**に依頼した。その交渉に当たった遊佐町野沢出身の**梅津曾五郎**の奉納による扁額。

「**光満六合**」の意味は、光が六合（りくごう：天地と東西南北、すなわち世界）に満つ。『日本書紀』天の岩戸の件、「日神之光、満於六合、故諸神大喜」。

木彫額の製作は遊佐町北目出身の**菅原大三郎**による。大三郎は、東京美術学校彫刻科を卒業後、岡倉天心の創設した日本美術院に採用され、奈良の唐招提寺の千手観音をはじめとする多くの国宝修理に従事した。

鳥海山大物忌神社蕨岡口ノ宮本殿

鳥海山大物忌神社 蕨岡口ノ宮境内図

三月十八日入峰の作法あり
衆徒行列して観音堂を三巡す
堂の前に大幣を立田楽数曲あり
進藤　重記『出羽國風土略記』

山本坊庭園 →

蕨岡の修験の家に生まれた者は、まず三歳になると懐児（だきちご）と称して、法会にはじめて参加して、修験の家の跡継ぎとして一山衆徒の承認を得る。その後、童髭礼（どうやり）・童法（どうほう）・壇内入（たないり）などの稚児舞を舞う。十六歳になると髪を剃り、得度して、卿名を名乗り、初峯入の新客を務める。その後、倶舎（くしゃ）・太平楽などの延年を舞い、二十五、六歳で田楽役を務める慣わしであった。これらの役が済むと三十三歳頃となり、鳥海山道者を案内する先達（せんだつ）の位である先途（せんだつ）の修行に入ることが許される。先途と呼ばれる位を得るためには、「胎内修行」と言われる十カ月にも及ぶ修行を行わなければならなかった。このように蕨岡修験においては、芸能と修行は、一体のものであって、年齢に応じた通過儀礼が組込まれ、入峯を重ねることによって、位階が昇進していった。

①稚児舞（壇内入）
②延年の舞（太平楽）
③大御幣祭

各務支考と神矢根

吹浦

打出て矢の根拾はん　しやがの花

打出でて、矢じりを拾おう。
しゃがの花が咲いていた
大物忌の社に詣でた記念として。

松尾芭蕉の高弟であり、蕉門十哲の一人である各務支考は、元禄五（1692）年、師の跡を訪ねて、『おくのほそ道』の酒田、象潟に遊び、酒田の伊藤不玉らと『継尾集』という文集を編んでいる。

四月十五日、羽黒山の門前町手向に住む俳人図司呂丸の案内で吹浦の大物忌神社に詣でて神の由来を聞き、里の童が神矢根（石の鏃）を拾うのを見て、「神明の利生はこの国に在すとなれば」とて、感激の涙を流し、その夜は吹浦に泊っている。

神矢根は、古代『続日本紀』など、いち早く石鏃が発見された記録の残る吹浦の名物となっていたようで、考古学を知らない昔の人々は、縄文・弥生時代の遺物である石鏃を大物忌の神威そのものの発現と考えていた。鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮では、今でも五月になると、本殿に続く裏参道脇などで、ひっそりと咲くシャガの花（アヤメ科）を見ることができる。

小山崎遺跡出土の石鏃

鈴木重胤と虫穴

江戸時代末期の国学の大家鈴木重胤は、庄内に来ること七回、多くの門弟があった。吹浦の大組頭、高橋津右衛門や蕨岡の大泉坊竈賢らと交流があった。鳥海山の虫穴の謂れを聞いた重胤はこのように記録し、歌を詠んでいる。

> 冨士のねに次て天下に山なしと、世に受ばりて云べきは、我見たるかぎりにては、大物忌神の敷ませる出羽の鳥海の山になむ有ける。國中の静めと神々しきさまなどは、今更に打出て云べくも非ず。（略）峯の岩ほのうつろなる中に、蝗穴と云る有り。國中の田より多くのぼりて、むらがりきほふ年は、必年有り。（略）

鳥海山外輪の虫穴（写真提供:佐藤要氏）

蝗を　いはほのほらに　こめおきて
年守らせる　鳥海の神山

鈴木重胤 長歌 鳥海山

鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮には、天保十五年（1844）六月十日、重胤が詠み、揮毫した六曲一双の屏風が残っている。

大御神 うかのみたまの 神留り うしはきいます 神山は
そびえたれかも みちのおく 出羽國と二國を ふもとになせ
れ 大國の 木草なびかす 山風は そこよりおこり 天ノ原 ほ
びこる雲は その山の 岫ゆぞ出る 國中の 山なるものを 山
中の 國なるごとく おちたぎち 漲る河は 四方八面に 水沫
逆巻き 谷を塞き 淀める水は 海なして 底ひもしらず そそ
りたち こごしき嶺を 岩がねの 峻き山を 二國の 國のしづ
めと 堅立て うしはく神は 貴きろかも 民草を 潤ほさむと
て 皇神の 鳥海山を 堤とやせ斯

鈴木重胤　六曲屏風「長歌　鳥海山」（非公開）
鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮蔵

上寺（うわでら）　修験集落の遺香

W坂と呼ばれる桜並木の車道が開かれる以前、参詣者は坂下の一ノ鳥居をくぐり、四百九十九段もの長い石段を経て、上寺に至った。今も、注連縄が掛けられた大欅を右に見て、ほどなく左に**大泉坊長屋門**の威容を目にする。四世、竈賢が天保五年（1834）に建てたと言われ、桁行18・9m、梁間4・5mの堂々たる構えである。西側の部屋は、棹縁天井で床の間が置かれ、使用人部屋というより、格式のある座敷のような性格の部屋であったと推定される。

さらに緩やかな坂道を行くと、目の前に鳥海山大物忌神社蕨岡口ノ宮の二ノ鳥居、その向こうに随神門、かつての仁王門が現れる。右に進めば龍頭寺である。その奥の**山本坊**には、斜面をそのまま活かした庭園が残されており、池には「鶴の島」「亀の島」と呼ばれる二つの浮島がある。また歌人**鳥海昭子**の生家としても知られ、根周り2・4m、目通り幹囲1・9mもある椿の巨木が町の天然記念物に指定されている。

この木の下に山梨県生まれの放浪の歌人、**山崎方代**の歌碑が建立されている。方代を敬愛した昭子は、昭和五十八年十一月のみちのくへの旅で、生家山本坊に案内する。その年平地に降った初雪は、根雪となった。山本坊に泊っての翌朝、雪を踏みしめ椿の繁った葉陰に小さくびっしりついた蕾を見つけて、「山本坊の庭の椿はすでにもう九萬八千七百の蕾をもてり」と方代は詠んだ。

左に折れて進み、さらに右に折れて奥まった坂道をのぼると、大きなトチノキと下居堂（現在の磯前神社）が現れる。

上寺には、もはや宿坊を営む家はないが、般若坊、玉泉坊、南ノ坊は、当時の宿坊建築の外観をそのままに残している。家を新築しても、注連縄を掛ける家々が多い。今も往時を思い起こさせる上寺である。

鶴の島亀の島とも父母が
すこやかに居てわれのふるさと

河口からさかのぼりつつ鳥海山の
万年雪までたどれば眠る

修験者が潔斎をせし崖ありて
シラネアオイは今年も咲けり

①

②

③

④

①大泉坊長屋門（国登録有形文化財）
②山本坊庭園
③山本坊の椿
④牛王宝印（般若坊）

上寺案内図

鳥海山龍頭寺境内

蕨岡修験を率いた寺

鳥海修験は、羽黒修験のように、一山として一致団結して修験宗団を組織することはなく、それぞれの登拝口ごとにそれぞれに修験集落を形成し、争いも繰りかえされた。このような中にあって、蕨岡修験は、順峰鳥海修験として広く信仰を集めた。

それを率いたのが龍頭寺で、かつて大堂社と呼ばれた鳥海山大物忌神社蕨岡口ノ宮に隣接して建つ。神仏習合のころ、寺と神社は敷地を分ける必要もなかったことを思わせる。

寺の言い伝えによれば、大同二年（８０７）、慈照上人の開創にして十一面観音を本尊とし、松岳山観音寺光岩院と称したとあるが、史料は残っていない。「出羽國風土略記」には、明暦元年（１６５５）に鳥海山龍頭寺と改称したとある。貞享元年（１６８４）以降、醍醐三宝院の直末の寺格を持ち、当山派修験として補任状を直接に交付し、鳥海山山頂で大物忌神を祀る鳥海山権現堂を独占的に運営した。

元禄十四年（１７０１）の山頂御堂修覆にはじまる矢島衆徒との争いは、庄内藩と矢島藩の領境争いに発展し幕府評定所に持ち込まれた。宝永元年（１７０４）、庄内藩勝訴の判断が下され、このときの境界が現在の山形県と秋田県の県境に引き継がれている。こののち、元文元年（１７３６）鳥海山大物忌神は、正一位を授けられた。

本堂玄関の金剛力士立像

木造阿弥陀如来座像

銅造薬師如来座像

神仏習合の息遣い

隆盛を極めた蕨岡修験は、明治に移り、廃仏毀釈の嵐の中、龍頭寺だけが寺として残り、僧籍があったすべての宿坊の当主は復飾し、集落全部の家々は神道となり、上寺には龍頭寺の檀家はない。現在、真言宗智山派の寺である。

大堂社仁王門（現在の蕨岡口ノ宮随神門）の一対の仁王像（金剛力士像）は、明治六年に龍頭寺の本堂玄関に移された。また同様に山頂佛として、夏は鳥海山山頂に、秋に下居堂に降ろされ、仏像本体、光背、台座の三つに分離できるように作られ祀られた薬師如来座像は、龍頭寺本堂に安置されることとなり、下居堂は、磯前神社となった。蕨岡口ノ宮に残った鐘楼堂は、神楽殿として衣替えし、五月三日の大御幣祭で蕨岡延年が奉納される。

本堂内陣須弥壇には、薬師如来座像、阿弥陀如来座像とともに鳥海山大物忌神社の御札が並び、明治の神仏分離政策の時代を経てもなお、神仏習合の息遣いが聞こえてくる寺である。

青面金剛石像

吽字碑　嘉永三年（１８５０）

十三佛板碑　江戸時代中期

女人参詣図絵馬　明治初期　観音堂
鹿野澤村後藤平六母、平津新田池田源次郎ほかの奉納
画像提供：秋田県立博物館

鳥海山信仰の様相を伝える堂宇

龍頭寺の本堂・開山堂・観音堂の三棟の建築物は、国の登録有形文化財になっている。

本堂の建築年は、棟札により天保十五年（1844）であることがわかり、棟梁は地元上寺の大工大川左膳、彫刻は西之坊融朝と弟子で娘婿の御舩治喜二（みふねじきじ）であった。柱が太く、内外陣廻りや縁上部の虹梁の大胆な絵様の彫刻などが目を引く。本堂の背面に接続する開山堂（位牌堂）は、昭和八年の建築で、昭和三十年頃に曳家された。外観は質素だが、内部は漆塗りを多用し、奥の位牌壇上部小壁には天女や寺紋、菊、牡丹の鏝絵を施すなど凝った意匠を見せる。観音堂は、もと経蔵であったものを、明治八年（1875）に移築したという土蔵造りの御堂で、十一面観音を祀る。向拝虹梁廻りの波と龍の彫刻は、地元鹿野沢出身の御舩治喜二によるものと伝わる。木鼻と繋虹梁が一体的に彫り出され、木鼻は龍の頭になり、龍の尾が繋虹梁に巻き付くさまは、圧巻である。

丸に酢漿草（かたばみ）

庄内藩主酒井家より、寺紋に使うことを許された。

地元鹿野沢出身の宮彫りの名工御舩治喜二が手がけたと伝わる観音堂正面向拝の彫刻

本堂軒下四隅の木鼻の象の彫刻

本堂大虹梁の牡丹の彫刻

開山堂奥位牌棚の小壁の鏝絵　左右に天女

明治のお雇い外国人による鳥海登山

外国人による最初期の鳥海登山は、明治政府から文明開化の指南役を任された「お雇い外国人」の科学技術者たちであった。

鳥海登山の嚆矢は、大阪造幣寮（現造幣局）に冶金技師として招かれ、古墳研究の先駆者としても知られるイギリス人のウィリアム・ガウランドで、明治九年（1876）の夏、造幣寮の同僚のディロンといっしょに登ったといわれている。

「近代地震学の父」ともいわれるイギリス人のジョン・ミルンも、明治十年（1877）七月三十日、鳥海山に登ったことが、明治二十年（1886）出版の「日本地震学会紀要〝Transactions of the Seismological Society of Japan〟」第九巻第二部に掲載の論文「日本の火山〝The Volcanoes of Japan〟」によってわかる。

これによると、朝5時半吹浦から馬の背に乗って出発、三合目の駒止で馬を降り、大平、河原宿、参籠所がある御浜などを経由して、呻吟苦行のうえ午後一時半に山頂に到達している。鳥海湖や壮大な外輪などの火山地形について説明し、山頂の御本社には数人の巡礼（道者）と二人の神官がおり、御祈祷を勧められ、お神酒を含めて意外にも〝refreshing〟（清々しいものだった）と述懐している。

古絵葉書　鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮

古絵葉書　鳥海山大物忌神社山頂　御室

夜明けの新山と影鳥海（佐藤要氏）

外輪の最高峰七高山（佐藤要氏）

日本列島中央部を横断する大きな溝状の地帯をフォッサマグナと命名、日本の近代地質学の礎を築き、ナウマンゾウにその名を残すドイツ出身の地質学者・考古学者ハインリッヒ・エドムント・ナウマン（1854～1927）も明治十二年（1879）、鳥海山に登り、講演会や論文で鳥海山の崇高美を讃えている。特に鳥海山の巨大な影が日本海に映し出される奇観「影鳥海」は強い印象を与えたようである。

「日本海に近いところにそびえているすべての火山のうちで、鳥海山は最も魅力的で興味深い山である。その峰は、一つの古い陥没火口の真ん中にあって、破砕された岩石のオベリスクをなしている。それは、麓を大きな雪田に覆われ、夢のような姿で高くそびえている。（中略）日の出のときにこの高台の縁に立ち、海面上の、この火山の巨大な三角形の影を見た人は、日が昇るにつれて、その影が急速に小さくなるのを見たであろう。世界中のすべてのものは足下にあって、太陽の光を浴びている。神秘的な色の変転がおさまってきて、山と谷が目をひくようになると、われわれが立っているところから南方の、あらゆる周辺から抜きん出てそびえる月山に目をうばわれる。」

「日本群島の構造と起源について」（1885）
山下昇　編・訳『日本地質の探求―ナウマン論文集―』
（東海大学出版会）より引用

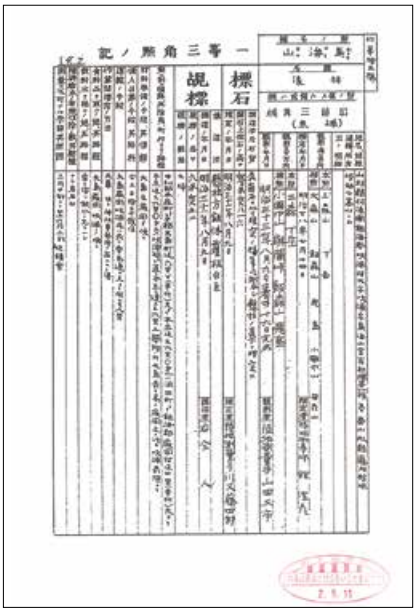
鳥海山（七高山）点の記

明治になって、殖産興業のために正確な地形図が必要になり、地図情報は軍事上も重要なことから、明治十七年（1884）からは陸軍省が担うようになり、その後参謀本部陸地測量部に引き継がれた。この三角測量の基準となる三角点設定の記録を「点の記」といい、選定の経緯や、測量担当の職名、案内の人夫名、労賃や資材の相場、入山の経路などが記入されている。

鳥海山の一等三角点は、見晴らしのきく七高山の頂上にあり、陸地測量部測量師の館潔彦が明治二十八年七月十四日場所の選定をした。明治三十一年八月九日測量手の川又藤四郎が標石の埋設と覘標（四角錐形の測量用櫓）を設置、櫓の構造の落ち着いた二年後の明治三十三年八月九日から十六日にかけて測量手の山田又市が観測をし、一連の作業を完了した。

選点者の館潔彦は、嘉永二年（1849）桑名藩士の家に生まれ、足軽となったが、鳥羽伏見の戦いで敗北し、賊軍側となってしまったため、生活のたつきを求めて上京、数学と英語を私塾で学び、二十三歳の時に工部省に測量四等少手として任官、以後専ら測量に従事し、生涯に二百六十三点もの一等三角点の選点をした。陸地測量部の測量士としては最多であった。

参考文献
山村基毅『はじめの日本アルプス』バジリコ2008



「鳥海山点の記」謄本の写し（国土地理院）

史跡鳥海山ゆかりの人々

北畠　顕信　きたばたけ　あきのぶ

不明～天授六・康暦二年（1380）か？

南朝方北畠親房の次男。延元三年・暦応元年（1336）兄顕家の戦死後、鎮守府将軍に任命され、主に東国を転戦する。正平十三年四月足利尊氏が没する。同年七月の顕信の寄進状は、この機に乗じて形勢逆転と陸奥・出羽両国の平穏を大物忌と月山の両所大菩薩に祈願してのものといわれる。

進藤　重記　しんどう　しげき

宝永六年（1709）～明和六年（1769）

吹浦村菅原多次兵衛と大物忌神社に仕える社家進藤官大夫の娘との間に生まれ、官大夫の子林大夫の養子となる。京都に上り、吉田家より裁許状を得、和泉守を名乗る。神宮寺衆徒と反目し、境内地の紛争で敗訴、追放される。神威の回復を志し、著述に没頭する。著書に『出羽國大社考』、『出羽國風土略記』など。

「鳥海山」名初出の鰐口／暦応五年（1342）の銘
鳥海山大物忌神社蔵

本間　光丘　ほんま　みつおか

享保十七年（1732）～享和元年（1801）

酒田本間家第三代。異名四郎三郎。一代で全国屈指の大地主に成長し、中興の祖といわれる。深く神仏を崇敬し、寄進行為が多いが、鳥海山信仰も篤いものがあり、鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮には、寄進の石灯籠が、同蕨岡口ノ宮には、逆修の宝篋印塔が残る。

鈴木　重胤　すずき　しげたね

文化九年（1812）～文久三年（1863）

淡路国生まれの国学者。思慕する平田篤胤から直接教えを受けるため天保十四年（1843）秋田に赴いたが、没後だったため、墓前で入門を果たした。来荘すること七度を数え、当地での国学の勃興に大きな刺激を与えた。大泉坊竈賢らと交わる。著書に『日本書記伝』、『祝詞講義』など。

ジョン・ミルン　John Milne

1850～1913

イギリス、リバプール出身。明治九年（1876）年来日。明治政府に招かれ工部省工学寮（後の東京帝国大学工学部）で鉱山学と地質学を教授。日本地震学会を創設するなど、「近代地震学の父」とも呼ばれる。日本人女性と結婚し、二十年にも及ぶ滞日中、多くの山に登り、火山活動について精力的に調査した。

斎藤　美澄　さいとう　よしずみ

安政四年（1857）～大正四年（1915）

酒田本町根上家に生まれ、神職斎藤清澄の養子となる。幼少より神童と称され、鈴木重胤の高弟である大滝光賢、照井長柄らに国学を学ぶ。明治十三年招かれて大和国大和神社の神職となり、奈良県の委嘱を受けて『大和史料』の編さんに当たる。官幣大社三輪神社宮司の後、明治二十六年帰郷して、鳥海山大物忌神社の宮司を大正元年まで務める。著書に『飽海郡誌』、「贈正五位本間四郎三郎光丘翁事歴」など。

森　敦　もり　あつし

明治四十五年（1912）～平成元年（1989）

長崎県生まれ。横光利一に師事。放浪時代の昭和三十年四月から十月にかけて、吹浦布倉の岡田方に寓居。昭和四十九年『月山』で芥川賞を受賞。同年短編集『鳥海山』を出版、大物忌神社や吹浦が印象深く描かれる。鳥海山の五合目大平に文学碑がある。碑文「鳥海山はわが観想の幻の山なりき」

「遠くこれを望めば、鳥海山は雲に消えかつ現れながら、激しい気流の中にあって、出羽を羽前と羽後に分かつ、富士に似た雄大な山裾を日本海へと曳いている。ために、またの名を出羽富士とも呼ばれ、ときに無数の雲影がまだらになって山肌を這うに任せ、泰然として動ぜざるもののようにも見えれば、寄せ来る雲に拮抗して、徐々に海へと動いて行くように思われることがある。」

「初真桑」

鳥海　昭子　とりのうみ　あきこ

昭和四年（1929）～平成十七年（2005）

本名中込昭子。上寺山本坊（鳥海家）出身。児童養護施設の保母となり、歌集『花いちもんめ』で、現代歌人協会賞を受賞。『逆立舞（かんばらまい）』などの歌集の他、エッセーも多数。平成十七年四月からNHKラジオ「ラジオ深夜便」で鳥海短歌が紹介されて反響を呼ぶ。その年の十月急逝。平成二十五年、『ラジオ深夜便　誕生日の花と短歌365日』が新装版で再出版された。

◆引用文献・参考文献ほか◆

進藤　重記　『出羽國風土略記』（歴史図書社1974復刻）
鈴木　重胤　『神道資料叢刊九　鈴木重胤紀行文集二』（皇學館大学神道研究所2006）
大乗寺良一　『鈴木重胤翁遺稿片影』1943
阿部　正巳　「鳥海山史」『山形県史蹟名勝天然紀念物調査報告　第5輯』（名著出版1974復刻）
御船　達雄　「建造物」『史跡鳥海山保存管理計画書』（遊佐町教育委員会2011）ほか
筒井　　裕　「鳥海山の歴史的背景」『鳥海山に関する調査報告書』（遊佐町教育委員会2008）
神田より子　『鳥海山修験』（岩田書院2018）

版画　十二天のうち梵天　鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮蔵

Guide to Historic Sites; CHÔKAI-ZAN

本パンフレットは、国指定史跡【鳥海山】のうち、山形県遊佐町所在の区域について解説したものです。

秋田県側には、金峰神社境内と霊峰神社跡（にかほ市）、森子大物忌神社境内と木境大物忌神社境内（由利本荘市）があります。

史跡鳥海山案内

三訂版発行　令和３年３月
（初版：平成26年３月　改訂版：平成29年６月）
編集・発行　遊佐町教育委員会

〒999-8301　山形県飽海郡遊佐町遊佐字舞鶴211
Tel：0234-72-5892　Fax：72-3313
E-mail：bunka@town.yuza.lg.jp